

『教行信証』公開の歴史

——金子大栄師を中心として——

島山正信

一

親鸞の思想・信仰を表現したものととして、『歎異抄』が今日広く親しまれていることは周知のとおりである。ところで、親鸞の思想と信仰とをより深く、徹底して明らかにしようとするならば、われわれは親鸞その人の著述を、とりわけその主著である『教行信証』を繙かねばならないであろう。実際、今日多くの人々が、そうして『教行信証』に関心をもつようになり、その思想にアプローチしているのである。

ところが、この著述は七百五十年も前に、しかも漢文で書かれたものであり、内容的にも経・論・釈の文類とかたちをとっており、その理解には極めて専門的な仏教の知識を必要とする。そのために、これまで長い間僧侶や一部の知識人以外にはほとんど顧みられなかったのである。そこにはまた、久しくこの書の公開が十分になされなかったという教団の歴史もあることである。

しかし、今日ではもはや、そのようなあらゆる歴史的限定の枠がはずされて、『教行信証』の存在そのものは、まことに公なるものとなった。が、そのことは、『教行信証』の有する思想が公になった、ということ直ちに意味するものではない。そこにはやはり多くの困難があり、いまだ十分に公開されてはいないのである。

ところが、それに対して、むしろ今日の時代そのものが、『教行信証』にその思想の公開を迫っている感がある。進歩の観念に基づいて構築されてきた文明全体が、もはやその担い手たるべき人間の予想をはるかに超えて、様々な問題状況を今日露呈してきているのである。そして、それらに対応するには、従来の諸思想ではもはや十分ではないと言われる。このとき、人間の思想を根本的に批判し、かつそのゆくえを示唆するものとして、親鸞の思想が浮かび上ってきたのである。

ここにおいて、われわれは教団と教学との使命を思わないわけにはゆかない。それらはまさしく、このような時代の要請に応答すべき当のものであるからである。『教行信証』の公開ということも、これからは、このような世界史的意義を担ったことがらとして、了解してゆくべきであろう。

このようなことを念頭におきながら、いま『教行信証』の公開の歴史について、考察しようと思う。

二

『教行信証』の公開の歴史ということについては、その流伝史というかたちで、歴史的・実証的にそれを考察していく方法もあるが、いまは時代を近代に限り、その中で、『教行信証』の公開に生涯を尽くされた金子大栄師を中心として、その業績と意義とを見てゆきたいと思う。

師の『教行信証』についての最初のまとまった著述としては、昭和二年八月、岩波書店から発行された『教行信証の概要』がある。

それは「序」にも述べてある通り、御影（神戸市）の「教行信証の会」における講義の摘要集である。したがって、その内容は、文字通りの概要である。しかしそこには、歴史的に二つの重要な意義がある。一つには、著者が感激をもって記しているように、いわゆる市井の人々とともにこの聖典を拝読するという、文字通り『教行信証』の公開の、歴史的記録であること。もう一つは、この著が他ならぬ岩波書店から刊行されている事実である。すでに『佛教概論』、『彼岸の世界』は世に出、続いて岩波文庫『歎異抄』、『佛教の諸問題』、『日本佛教史観』、『教行信証の研究』、岩波文庫『教行信証』と、次々に刊行されてゆくのである。

これら、師の代表作が岩波書店から刊行されたことは、深い意義をもつ。それは、一方には、師を学界の中心に送り出すとともに、他方、親鸞教学を時の知識人たちに公開する役目をもったに違いない。このことは特筆すべきことさらに属することと思う。

三

さて、師は一方にはそのように、時代の思想界に向って『教行信証』の思想を公開してゆくと同時に、内に沈潜して『教行信証』の伝統する真精神を内観しようとされた。それがやがて『教行信証講読』として結実するのである。その際、この講読の姿勢を次のように自ら表明されている。

恐らく今より後、親鸞の『教行信証』は様々な方面より研究せられ、したがってそれに対して種々の批判と評価とが加へらるゝであろう。私はそれらの学に対して敬喜を惜しむものではない。併し私は自らの宗教的要求に随つて人生を行学せんと願ふ限り、『教行信証』に対する伝統的な信仰を保持する。私の願ふところはわが知識の一部として『教行信証』を明かにすることではなくて、それに於て我が宗教的要求を明かにしたのである。『教行信証講読』は、この願ひから筆を執つたのである。したがつてこの事業の死活は、依然として精神を失へる伝統に支配されてゐるか、或は少しでも其処に宗教的要求を明かにし得るかである。註一

そして、更に具体的に、その講読の方法を示していられる。

第一にこの解釈に於て、自分は何処までもそれを自分の為にせねばならぬ。われ自らの満足できぬやうなものを人が喜んで読んでくれる筈がないことは既に明かに知つてゐることである。さうすれば自分が書いたものに依りて自分が救はれるやうなものでなくては、全く無意味といはねばなるまい。私は私自身の仕方で繰り返しが多過ぎる程説明するとしても、その説明を聞く正の相手は自分である。啓蒙的といふことも、その蒙者は自分であることに於て避けず、論理といふことも徒らに解釈の具にしてはならぬのである。

第二に自分はこの解釈に於て、自分の全力を傾倒しよう。『教行信証』は元來、親鸞の仏教論であり、また生活の記録であるのであるから、自分の解釈もまたわが生活の記録であり、また仏教の全知識であらねばならぬ。それ故、自分の学問はすべてこゝへ廻向し、生命も亦こゝに捧ぐべきである。願はくは始終この精神を以て一貫

しよう。^{註一}

ここには極めて重要な問題が述べられている。先には伝統への深い尊敬と、それに対応する宗教的要求について、後にはその宗教的要求を明らかにするために、徹底的に内観という方法によらねばならないこと、それらのことが情理を尽くして説かれているのである。

『教行信証』の公開ということも、基本的にこれらのことがらが明確に押えられていなければならぬであろう。それは、ただ知識として、客観的な学として公になることにとどまらない。その内面には、われらの宗教的要求というものがあるはずであって、そのことを明らかにすることが、『教行信証』の願いにほかならないのである。

四

ところで、われわれは、右のこととともに、次の二つのことがらにも注目しないわけにいかない。

というのは、一つには、昭和二十四年六月から雑誌『全人』に連載される『教行信証』の意識のお仕事であり、その一部は全人社より『意識教行信証——教行の巻』として刊行され、やがてその全部が『口語訳教行信証附領解』として刊行されることとなるのである。

他の一つは、師の校訂による岩波文庫『教行信証』の刊行である。

われわれはここに、『教行信証』の公開ということについての、極めて具体的な二つの事実を見ることができると。それは一つには、『教行信証』のテキストを広く一般に公開することとしてあらわれ、他の一つは、その難解な内容

を少しでも一般に親しめるようにと、意訳（口語訳）というかたちで、公にされたことである。

『教行信証』の思想・信仰の公開と言っても、まず『教行信証』のテキストそのものが公開されなければ、ことは始まらないと言うべきであろう。

たとえば、岩波文庫『歎異抄』は師の校訂によって昭和六年六月に発行されており、この文庫文の存在が、いかに多くの人々を裨益したかは、あまりにもよく知られている。そこでは、『歎異抄』のテキストが公開されたという一事が、大きな意味をもってくるのである。

したがって、『教行信証』が岩波文庫として公刊されたことも、それによって、『教行信証』の存在とその思想とが公開される、大きな契機となったに違いない。

その発刊に当って、師自身次のように述べられている。

『教行信証』の内容は普遍的の真実を顕わすものである。けれどもその表現は特殊のものに感ぜられる。ここにこの書の難解さがある。顧みれば私がこの書を文庫本にと引受けたのは二十数年以前であった。それを今日まで実行しえなかつたことは、徒らにその難解を思っていたからである。^{註三}

しかし、一方では、この刊行は久しく待望されていたようである。たとえば、その当時の雑誌『真人』には、次のような記事があつて、そのことを伝えてくれる。

金子先生が校訂された『教行信証』が岩波文庫から出ました。なごらく待望の書でしたので初版はたちまち売切れ、近く第二版が出る由。親鸞ブームの声もありますが、こうした原典が一般からじつくりと読まれることはよろこばしいこと註四です。

また、因に、数年後刊行された、『原典校註真宗聖典』も同じ意図のもとに編集されたことが、末尾の「刊行縁起」にうかがわれる。

一方、『教行信証』の意識についても、師自ら次のように動機を述べられている。

この口語訳は『教行信証』をもっと自他に親しめるものにしたという願いから、着手せるのであった。しかるに思うて見れば、この願は已に本来は漢文である原典が、一般には延書にして流布されることにも現われているのである。しかればこの口語訳も畢竟は延書のところを徹底しようとするものに他ならぬものであった。註五

ところで、ここに意識といわれ、口語訳といわれる、その性格について考えてみたい。というのは、現在多く刊行されている『教行信証』の現代語訳と、その内容について違いがあるように感ずるからである。現代語訳の多くは、古典としての『教行信証』の文章の一々を、いわば逐語的に現代語に置きかえていただけのようである。それによって文章は平易になったに違いないが、その内容はけっして平明になったとは言えない。これに対して、師の意識（口語訳）は、文字通り、『教行信証』のこころ（意）を領受した立場からその内実を伝えようとするものであって、そ

こに特色があると言えよう。その意味から、「領解」もけっして付け足しや補足ではなく、この意識の立場を闡明するものにほかならない。

『教行信証』の公開といっても、それがただ文章理解の上でのみなされるのであるならば、それだけではいまだ十分でないであろう。ここでは、『教行信証』の精神を伝承し、師のいわゆる「聞思」の立場に立つて、その内容を領解しようとするとき、はじめて十全の意味をもつことになるのである。師の意識はまさしくそのような性格のものであった。

このように見てくると、師の多くの著述は『教行信証』の公開への強い意志に裏付けられていることが分る。そして、はじめには、それを思想として現代に再生させようとされ、続いて、そのテキストを公開することによって一般に流布することに努められ、更にその意識によって、内容をいっそう親しみやすいものとされたのである。

五

以上、師における『教行信証』の公開のお仕事の中で、重点的に三つの方面から、考察を試みた。ところで、われわれは師の晩年のお仕事の中で、次の二つのことがらを忘れるわけにはいかない。

一つは、『教行信証総説』として刊行された、昭和三十七年度の大谷大学における講義録である。他の一つは、昭和四十三年五月、師の米寿を祝賀して出版された『晩学聞思録』である。

『教行信証総説』は、もと「真宗概論としての教行信証の概要」という講義題目であったが、その内容は、『教行信証』の思想の普遍性に対する悠々たる自信のもとに、その思想性を全仏教、更に世界の宗教をも視野におさめて、

講述されたものである。おそらく、これほどまでに大きなスケールで『教行信証』が講ぜられたことは、他にないと思われる。また、そのことは、師自身の思想の歩みが大きな実を結び、円熟したことを表わすものであろう。

ここでは、真宗概論ということ、仏教・宗教という概念で確認されようとしている。つまり、まず真宗というものは、どこまでも仏教であって外の教ではないということ。それは、生死を問題にしている点であり、更にその生死を超えることを課題としている点で、外の教とは異なると言われている。

また真宗は、仏教の中でも、ことに宗教的であるということ。その意味は、聖道と異なり、どこまでも大衆的、庶民のものであって、人間生活を離れないで、むしろそれを全うしてゆく道であるからだと言われている。

したがって、仏法にして宗教なるものが、浄土真宗であるとされ、内容的に言えば、生死を問題としつつ、それを大衆の道として公開するものとされるのである。

このような師の規定は、浄土真宗ということがらを、他の聖道の教や一般の宗教と対比することによって、逆にその意義を開顕しようとするものであり、そのことを通して、自らの立場を公開してゆくことになるのである。

内容的にみても、東西にわたる広汎な知識をもとに、『教行信証』の重要な問題点が論じられており、ここにわれわれは、師の『教行信証』の思想公開のお仕事の集大成を見る思いがする。

『晩学聞思録』は、晩年の師の『教行信証』理解を発表されたものである。それは、「二部作『教行信証』」という、はじめの題目が示すように、『教行信証』全体の構造を新たに論ずるものである。

その内容の詳細については、極めて複雑で困難なくつかの問題点があるが、いま要点を略述すれば、師は『教行信証』を二部に分けて、前四巻を第一部とし、後二巻を第二部とされている。このことは、師の一貫した立場のよう

に思われる。ただし、その二部の関係については、時期によってやや異なつた領解を示しておられるようである。

『教行信証の概要』並に『教行信証講読』においては、「廻向と転入」というかたちで、前四巻は如来回向を中心として、われわれにとつての宗教原理を明らかにし、後二巻は衆生の転入を主題として、われわれの宗教生活を批判するものとされている。

二部作『教行信証』という立場は、この領解をいっそう進めたものにほかならない。たとえば、ここでは、二つのキーポイントが押えられている。それが、「願心の廻向と光明の摂化」並に「諸仏と善知識」ということである。前者は、先の「廻向と転入」ということを、ともに如来の力用として見る立場から、「廻向と摂化」と題されたのであるし、後者は逆に衆生の転入を主題とし、その機縁を論ずる立場から、「諸仏と善知識」と題されたものである。すると、それらのことからは、すでに初期の著作においても十分に暗示されていたことになるであろう。

では、師が二部作ということを特に主張される着眼点はいったどこにあるのであろうか。それを、師自ら、つづく「真宗の二方面」という論文の総説において、明らかにしておられる。すなわち、絶対真宗・相対真宗という見方である。そのことは、師において、宗派としての真宗、教団という限定をもっている真宗ということへのめざめを契機として展開されてくる。それは別な表現をすれば、普遍真実の宗教としての真宗も、社会的には教団という形態を伴ってくるし、またそれ自体歴史的に形成されてきたという認識である。

そこでは、普遍絶対の教法も相対社会の中に表現されなければ、その存在意義はないであろうし、またさまざまの歴史的状況のただ中に普遍絶対の教法を証^{あか}することがなければ、われわれの歴史といつても流転のほかにはない。

おそらく、このような問題意識の強まりが、師をして、二部作『教行信証』を主張させた根本動機であろうと思わ

れる。

そのような問題意識のもとに、『教行信証』の前四巻を、二回向四法の教学体系として、絶対真宗と押え、後二巻を、ことに「真仏土巻」と「化身土巻」との呼応に注目して、相対真宗と呼ばれているのである。

このような『教行信証』の構造論は、他の、たとえば、前五巻を真実の巻とし、第六巻を方便の巻とする見方とは明らかに異なっており、また曾我量深師の前二巻傳承の巻、後四巻已証の巻とする卓見とも全く相違している。その特色を一言でいえば、その構造論そのものが課題的である、ということである。今日の歴史社会のただ中に、われわれはいつたいどのようなようにして、教法を聞き開いていったらよいのか。またどうすれば、それを証し、公開してゆくことができるのか。まさしくそのことがわれわれに問われているのである。

六

これまで、師の『教行信証』に関する主要著作を中心にして、その公開の内容と意義とを大略見てきたつもりである。これら以外にも、関連する他の多くの著述が残されている。それらは別に、まとめて著作目録として添えることとした。

その中でも、注目すべきものとして、師が晩年に及ぶまで折にふれて語られた講話がある。たとえば、「総序」について『本願の宗教』・『遇法の因縁』が、「行巻」については『念仏——ただ一筋の大道——』、「信巻」では『現生十種の益』・『親鸞の人生観』・『大信海』・『信心』・『証巻』「真仏土巻」による『大涅槃』等である。それらは、平易な表現のうちに、『教行信証』の真理を説き明かそうとするものであり、公開という意味においては、最も実際

的なものであつたであろう。聴衆に向つて語ることは、それにおいてかえつて、自ら教法を聞くことであるとする師の「聞思」の姿勢は、教法を公開しようとする際の心構えについて、深く示唆するものである。

こうして、師の生涯を振り返つてみると、すでに処女作『真宗の教義及其歴史』のうちに、『教行信証』の思想を近代において明らかにし、公開しようとする、師の十分な意欲がうかがわれる。そうしてみれば、師の生涯の全体が、いわば『教行信証』の公開のために尽くされた一生であつた、と言つても、けつして過言ではないに違いない。

(終)

(この論文は、一般研究・共同研究「『教行信証』章節の共通表示化への研究」の一環として執筆されたものである)

註

註一 金子大栄著『教行信証』の講読に就いて『金子大栄著作集』第六卷(春秋社 昭和五六年)二二頁。

註二 同二三頁。

註三 金子大栄校訂『教行信証』(岩波書店 昭和四七年)解説一五―一六頁。

註四 『真人』第一〇六号(昭和三年十一月一日発行)「後記」(竹田)による。

註五 金子大栄著『口語訳教行信証附領解』(法蔵館 昭和五五年)あとがき五三〇頁。

金子大栄 『教行信証』 関係著述目録 (畠山正信編)

〈凡例〉

- 一、本目録は、金子大栄師の著述のうち、とくに『教行信証』に関する著書並に論文等を収録した。
 一、収録した著述は、大正初年より昭和六十一(一九八六)年までに発表されたものである。
 一、①は単行本として刊行されたもの、②は雑誌に掲載されたものである。
 一、著述のうち、原本未確認のものについては、備考欄にその典拠を明示した。

No	西 暦	和 号	年 令	月 日	著 述	
1	一九一四	大正三年	三四	四月二十日	『教行信証』の研究 (『無尽燈』第十九卷第四号)	②
2	一九一五	大正四年	三五	二月十日	『真宗の教義及其歴史 (無我山房)』	①
3	一九一六	大正五年	三六	六月二十五日	『親鸞聖人の宗教』(無我山房)	①
4	一九二二	大正十一年	四二	二月五日	『真宗を敬信して』(法蔵館)	①
5	一九二五	大正十四年	四五	六月十五日	『親鸞教の研究』(大村書店)	①
6	一九二六	大正十五年	四六	一月一日	『本願の表現とその素材としての人生』教行信証を讀みて(一)	②
7				二月一日	『聞法と自覚』(二)	②
8				三月一日	『真実教の成立』(三)	②
9				四月一日	『広く法蔵を聞きて』(四)	②
10				五月一日	『教法論』(五)	②
11				六月一日	『真実の行、選択の行』(六)	②
12				七月一日	『念仏の意義』(七)	②
						備考(内容)
						一一七
						一一六
						一一五
						一一四
						一一三
						一一二
						『仏座』第一卷一号
						『教行信証』に就いての感想』等
						前八章で『教行信証』を概説
						標題の章で『教行信証』を概説

No	西暦	和号	年令	月日	著述		備考(内容)
64				十二月一日	「浄土の諸徳」 〔卷〕	〔雑〕	六〇号
63				十一月一日	「涅槃と仏性」 〔癸〕	〔雑〕	五九号
62				十月一日	「常楽の浄土」 〔亥〕	〔雑〕	五八号
61				九月一日	「涅槃の意義」 〔寅〕	〔雑〕	五七号
60				八月一日	「光明の諸徳」 〔卯〕	〔雑〕	五六号
59				七月一日	「真仏土」 〔辰〕	〔雑〕	五五号
58				六月一日	「園林遊戯」 〔巳〕	〔雑〕	五四号
57				五月一日	「願生道と成仏道」 〔未〕	〔雑〕	五三号
56				四月一日	「願心莊嚴」 〔申〕	〔雑〕	五二号
55				三月一日	「浄土の菩薩」 〔酉〕	〔雑〕	五一号
54				二月一日	「還相回向論」 〔戌〕	〔雑〕	五〇号
53	一九三〇	昭和五年	五〇	一月一日	「浄土と大涅槃」 〔癸〕	〔雑〕	四九号
52				十二月一日	「真実証」 〔癸〕	〔雑〕	四八号
51				十一月一日	「抑止と摂取」 〔甲〕	〔雑〕	四七号
50				十月一日	「逆悪と謗法」 〔甲〕	〔雑〕	四六号
49				九月一日	「月愛三昧」 〔甲〕	〔雑〕	四五号
48				八月一日	「罪惡に対する弁明と懺悔」 〔甲〕	〔雑〕	四四号
						〔雑甲〕	備考(内容)

82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65
					一九三二												一九三二
					昭和七年												昭和六年
					五一												五一
六月一日	五月一日	四月一日	三月一日	二月一日	一月一日	十二月一日	十一月一日	十月一日	九月一日	八月一日	七月一日	六月一日	五月一日	四月一日	三月一日	二月一日	一月一日
「道教批判」(画)	「邪道雜記」(画)	「天界と人生」(画)	「真偽の勘決」(三)	「末法燈明記」(三)	「浄土教興起の時機」(画)	「三願転入の表白」(六)	「難信論」(六)	「果遂の誓」(三)	「『阿弥陀経』の一心」(六)	「雑行雑修の分別」(六)	「聖道より浄土へ」(画)	「定散の心と念仏の信」(画)	「願生心の自己反省」(三)	「来迎論」(三)	「真実と方便」(三)	「真仮の分別」(六)	「本願酬報の意義」(六)
雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑
七八号	七七号	七六号	七五号	七四号	七三号	七二号	七一号	七〇号	六九号	六八号	六七号	六六号	六五号	六四号	六三号	六二号	六一号

『教行信証』公開の歴史

No	西曆	和号	年令	月日	著述		備考(内容)
99				八月二十日	『教行信証講読—教行卷—』(全人社)	甲	No 87の再刊
98				六月二十日	『正信偈講話』(全人社)	甲	
97	一九四七	昭和二十二年	六七	一月二十日	『本願の宗教』(全人社)	甲	No 86の再刊
96	一九四六	昭和二十一年	六六	三月二十日	『教行信証講読—真仏土卷—』(東光書林)	甲	
95				八月二十日	『教行信証講読—信卷—』(全人社)	甲	No 89の再刊
94	一九四四	昭和十九年	六四	八月十日	『教行信証講読—証卷—』(全人社)	甲	No 89の再刊
93	一九四三	昭和十八年	六三	十一月二十日	『親鸞教の研究』(第一書房)	甲	No 5の再刊
92	一九四二	昭和十七年	六二	十二月十五日	『真宗の教義と其の歴史—歴史編—』(丁字屋書店)	甲	No 2の改訂版
91				五月三十日	『教行信証講読—真化の卷—』(著作刊行会)	甲	
90	一九四一	昭和十六年	六一	一月二十日	『真宗の教義と其の歴史—教義編—』(丁字屋書店)	甲	No 2の改訂版
89	一九四〇	昭和十五年	六〇	十二月三十日	『教行信証講読—信証の卷—』(著作刊行会)	甲	
88	一九三九	昭和十四年	五九	六月二十日	『正信偈講話』(著作刊行会)	甲	
87	一九三八	昭和十三年	五八		『教行信証講読—教行の卷—』(著作刊行会)	甲	
86	一九三六	昭和十一年	五六	九月十日	『本願の宗教』(信道会館)	甲	「総序」の文の講話
85				八月	『教行信証の概要』(後編) (讚仰会)	甲	『親鸞教学』三〇号による
84				八月一日	『真宗興隆の事録』(註)	雜	八〇号
83				七月一日	『祠鬼神の非義』(註)	雜	七九号
No						雜甲	備考(内容)

117				十月五日	「本願力」	雑	三一九
116				九月五日	「一声称念の力」	雑	三一八
115				八月五日	「仏徳に相応して」	雑	三一七
114				七月五日	「徳と名」	雑	三一六
113				六月五日	「念仏成仏」(三)	雑	三一五
112				五月五日	「念仏成仏」(二)	雑	三一四
111				四月五日	「念仏成仏」	雑	三一三
110				三月五日	「転成の徳」	雑	三一二
109	一九五〇	昭和二十五年	七〇	一月三十日	「往生浄土の教」	雑	三一―
108				十二月五日	『正信偈講読』(会人社)	甲	
107				十二月	「眞実の徳」	雑	二一一二
106				十一月	「不退の法―龍樹の二―」	雑	二一一一
105				十月三十日	「不退の法(行の卷)―龍樹の一―」	雑	二一〇
104				九月十五日	「大意」「経説」	雑	二一八・九
103				七月二十五日	「教」(『教行信証』意訳)	雑	二一七
102	一九四九	昭和二十四年	六九	六月二十日	「序」(『教行信証』抄訳)	雑	『全人』第二卷第六号
101				十月二十日	『教行信証講読―真化卷』(会人社)	甲	No 91の再刊
100	一九四八	昭和二十三年	六八	九月二十日	『親鸞教の研究』(会人社)	甲	No 93の再刊

134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	No
一九五二														一九五一			西曆
昭和二十七年														昭和二十六年			和号
七二														七一			年令
一月五日	十二月五日	十月五日	九月九日	九月五日	八月五日	八月	七月五日	六月五日	五月五日	五月五日	四月五日	三月五日	二月五日	一月五日	十二月五日	十一月五日	月日
「真の仏弟子」	「横超の道」	「信楽開発の一念」	『意識聖典』（全人社）	「大信海」	「欲生」	『意識正信偈』（全人社）	「信楽」	「至心」	「三心釈」	『意識教行信証—教行の巻』（全人社）	「二河譬」	「至誠心・深心」	「本願・淳一相続の心」	「信のよろこび」	「正信讃歌」	「一乗海」	著述
雑	雑	雑	単	雑	雑	単	雑	雑	雑	単	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑・単
五一	四一一	四一〇		四一九	四一八	想「金子大栄—人と思想」による	四一七	四一六	四一五		四一四	四一三	四一二	四一一	三一	三一〇	備考(内容)

152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135
	一九五四							一九五三									
	昭和二十九年							昭和二十八年									
	七四							七三									
二月二十日	一月二十日	十二月二十日	十一月二十日	十月二十日	七月十日	六月二十日	四月二十日	一月二十日	十二月二十日	十一月五日	十月五日	九月五日	八月五日	六月五日	五月五日	四月五日	二月五日
「帰結」	「本願酬報」	「浄土の徳」	「久遠の郷土」	「常楽の浄域」	『教行信証の概要』（全人社）	「涅槃」	「無量光明土」	「入出自在」	「柔軟心」	「入法一如身土不二」	「浄土の聖者」	「還相回向」	「真実の証」	「抑止と摂取」	「逆悪と謗法」	「業縁―阿闍世の獲信（統）―」	「阿闍世の獲信」
雑	雑	雑	雑	雑	第	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑
七二	七一	六六	六五	六四	No 25の再刊	六一三	六一二	六一一	五一〇	五一九	五一八	五十七	五十六	五十五	五十四	五十三	五十二

169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	No
		一九六〇		一九五八						一九五七	一九五六			一九五五			西 曆
		昭和三十五年		昭和三十三年						昭和三十一年	昭和三十一年			昭和三十年			和 号
		八〇		七八						七七	七六			七五			年 令
六月十日	三月二十八日	三月十日	六月十五日	三月一日	十一月二十五日	十月二十五日	十月七日	七月二十日	七月五日	四月二十五日	一月三十一日	十一月二十五日	五月十日	三月十日	十二月二十日	四月二十日	月 日
『教行信証の諸問題』（在家仏教協会）選集第五卷	『原典校註—真宗聖典』（法蔵館）	『化身土卷の意義』（『教化研究』二十六号）	『正信偈講話』（在家仏教協会）	『大涅槃』（あそか書林）	『仏教の人間観』（在家仏教協会）	『親鸞教の研究』（在家仏教協会）選集第四卷	『教行信証』（岩波書店）	『教行信証講話—真化の巻』（在家仏教協会）選集第八卷	『遇法の因縁』（西村為法館）	『教行信証講話—信証の巻』（在家仏教協会）選集第七卷	『教行信証の研究』（岩波書店）	『教行信証講話—教行の巻』（在家仏教協会）選集第六卷	『法縁のよろこび—教行信証について』（あそか書林）	『真実証』（『教化研究』第八号—御本書講讀Ⅱ）	『大行』（『教化研究』第七号—御本書講讀Ⅰ）	『本願と成就』	著 述
甲	甲	雜	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	雜	雜	雜	甲
			No 88の再刊	の講話」「真仏土卷」等	No 100の再刊	岩波文庫	No 91の再刊	総序の文の講話		No 89の再刊		No 87の再刊				七—三	備考（内容）

187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170
一九六六						一九六五		一九六四	一九六三				一九六一			一九六一	
昭和四十一年						昭和四十年		昭和三十九年	昭和三十八年				昭和三十七年			昭和三十六年	
八六						八五		八四	八三				八二			八一	
三月一日	十二月十日	十二月一日	十一月一日	十月二十日	六月二十五日	六月一日	十一月十日	四月二十日	三月一日	十一月二十五日	七月二十五日	四月一日	二月二十日	十月二十日	七月十二日	七月十日	六月十五日
「教行信証のおたより」――いわれの巻――（『在家仏教』）	「願心の廻回と光明の撰化」――二部作教行信証（統）――「親鸞教学」第七号	「教行信証のおたより」（『在家仏教』）	「教行信証のおたより」（『在家仏教』）	「真宗の教義と其の歴史」（百華苑）	「二部作教行信証」（『親鸞教学』第六号）	「現生十種の益」（弥生書房）	「親鸞著作全集」（法蔵館）	「教行信証総説」（百華苑）	「教行信証の性格」（『大谷学报』第四十二卷第四号）	「正信偈新講」下卷（あそか書林）	「正信偈新講」中卷（あそか書林）	「論文集二 真宗篇」（在家仏教協会）選集続二卷	「浄土真宗」（『教化研究』第三十五号一教巻研究）	「正信偈新講」上卷（あそか書林）	「顕浄土真実教文類講録」（安居事務所）	「口語訳教行信証附領解」（法蔵館）	「廻向論」（『親鸞聖人の教学と伝記』百華苑所収）
（雑）	（雑）	（雑）	（雑）	（単）	（雑）	（単）	（単）	（単）	（雑）	（単）	（単）	（単）	（雑）	（単）	（単）	（単）	（単）
			「教行信証」の意識	No 90 92の改版		「信巻」講話						No 167を含む					

No	西暦	和号	年令	月日	著述		備考(内容)
204				七月三十日	『教行信証講読—信証巻』(春秋社) 著作集第七巻	甲	
203	一九八一	昭和五十六年		五月三十日	『教行信証講読—教行巻』(春秋社) 著作集第六巻	甲	
202	一九八〇	昭和五十五年		九月一日	『真宗入門—教行信証のころ—』(東本願寺出版部)	甲	
201				十一月二十日	『意識聖典』(法蔵館)	甲	No 131の再刊
200	一九七八	昭和五十三年		二月十日	『教行信証の研究』『教行信証の諸問題』(春秋社) 著作集第九巻	甲	
199	一九七六	昭和五十一年	九五	五月二十五日	『信心』(弥生書房)	甲	「信巻」の講話
198	一九七四	昭和四十九年	九四	十一月十日	『念仏—ただ一筋の大道—』(雄渾社) 随想集第十巻	甲	「行巻」の講話
197	一九七三	昭和四十八年	九三	三月一日	「行信論」(『教行信証の研究』文栄堂所収)	甲	
196				十二月二十日	「行信論」(『親鸞教学』二十一号)	雜	
195	一九七二	昭和四十七年	九二	二月十日	『親鸞の世界』(徳間書店)	甲	「親鸞の世界—教行信証—の理念」等
194				五月三日	『晚学閑思録』(在家仏教協会)	甲	No 182 186 190を含む
193	一九六八	昭和四十三年	八八	一月一日	「教行信証のおたより」(『在家仏教』)	雜	
192	一九六七	昭和四十二年	八七	四月一日	「教行信証のおたより」(『在家仏教』)	雜	
191				十月二十日	『大信海』(弥生書房)	甲	「信巻」大信海釈の講話
190				七月一日	「諸仏と善知識」—二部作教行信証(三)八号—(『親鸞教学』第八号)	雜	
189				六月二十日	『親鸞の人生観』(法蔵館)	甲	「信巻」真仏弟子章の領解
188				六月一日	「教行信証のおたより」—さとのりの巻—(『在家仏教』)	雜	
No	西暦	和号	年令	月日	著述	雜	備考(内容)

211	210	209	208	207	206	205
一九八六		一九八五	一九八四	一九八三	一九八二	
昭和六十一年		昭和六十年	昭和五十九年	昭和五十八年	昭和五十七年	
三月二十日	八月十日	七月十日	一月二十日	四月十五日	六月三十日	十二月二十日
『真宗の教義と其の歴史』(春秋社) 著作集別巻三	『顕浄土真実教文類講録』(春秋社) 著作集別巻二	『正信偈講読』(春秋社) 著作集別巻一	『真宗聞思録』(春秋社) 著作集第十二巻	『教行信証総説』(春秋社) 著作集第十巻	『親鸞教の研究』(春秋社) 著作集第二巻	『教行信証講読—真化巻』(春秋社) 著作集第八巻
④	④	④	④	④	④	④